

# キリシタン版『落葉集』の漢字音について

大島 英之

## 1 はじめに

本稿は、キリシタン版漢字辞書『落葉集』（1598年刊）に付された漢字音について、特に当時流通していた漢字音がどの程度反映されているのかという観点から、調査・報告するものである<sup>1</sup>。

### 1.1 問題の所在

日本漢字音は、一字に複数の音を有することが少なくない。その主な要因は、呉音・漢音という相異なる二つの体系の字音が複層的に保存されたことにある。とはいえ、現代日本語においては、単字音形としてふつうに思い浮かべる字音は概ね一つに定まっており、また、複数の音を有する字であっても、漢語内の位置や字義に応じて使い分けられているケースが多く、実質的に「一元化」しているという指摘がある（屋名池 2005）。学問の場から離れた、日常使用の場における字音が、一音に固定化する傾向については、院政鎌倉期の変体漢文訓点資料にすでに認められている（沼本 1973）。近年では、漢文訓読の場における違例に注目する形で、中近世における実態を論じた研究もみられる（坂水 2016、石山 2020 など）。

以上のような研究を受け、筆者は、一字一音を原則とし、網羅的な付音が認められる中近世の字書類に、当時流通していた漢字音の実態がうかがえるのではないかという見通しのもと、大島（2022）において「色葉字平他」類の韻書二本（大東急記念文庫・龍門文庫本）の漢字音を分析した。その結果、二本とも漢音が優勢ではあるものの、流通字音を反映したとみられる呉音や慣用音が多く認められ、特に龍門文庫本では呉音の割合が四割以上に達することが確認された<sup>2</sup>。また、苦（ク）・布（フ）・毎（マイ）など、繰り返し呉音形で現れる漢字が 17 字得られ、その多くが「常用漢字表」所載の音形と一致することか

<sup>1</sup> 『落葉集』の漢字音を主たる対象とした先行研究としては、字音仮名遣いを整理し、仮名遣い書からの影響を想定した鄭（2005）や、現代からみて特殊な字音を収集した林（2017）がある。

<sup>2</sup> 大島（2022: 13）表 1 に示した、清濁のみで対立する例を除いた呉音・漢音の字種数ならびに項目数により計算した。

ら、これらの諸字は当時からすでに呉音に一元化していたものと解釈した。

本稿では、大島（2022）の続きとして、キリシタン版『落葉集』を取り上げる。

『落葉集』は、イロハ順に漢語を排列した「落葉集」（以下「本篇」と呼称）、イロハ順に和訓を排列した「色葉字集」、部首別に漢字を排列し音訓を示した「小玉篇」の三部で構成される。「小玉篇」は、その序文に「右両編の内より今又せばき玉篇をあみ畢」とあり、「本篇」「色葉字集」より後出のものとなる<sup>3</sup>。

本書の体例としては、「本篇」と「小玉篇」では掲出字の右傍に、「色葉字集」では掲出字の左傍に字音が示され、他方ないし字の下部に和訓が示される。左右の傍訓は一つに限られている。また、各篇末には「違字」として、正誤表が掲げられている。

山田俊雄は、「本篇」・「小玉篇」の左傍訓が相互に一致する例の多いことを示し、「色葉字集」の右傍訓についても同様の傾向にあることを予見して、「単字の右旁もしくは左旁に位置する訓は、いはば定訓（標準的な訓）として示されたものとして大過ないと云ひうる」と論じた（山田 1971: 255）。この見解にしたがえば、字音についても「定音（標準的な音）」というべきものが示されているのではないかと予想されるが、山田（1971）では字音についての検討結果は省略されている。ただし、白井（2022）によれば、「漢字の左右に置かれる音訓は3部で原則として一致する」（白井 2022: 49）ようである。本稿では、この点を再確認した上で、さらに、呉音・漢音の割合を求めることで、字音体系を揃えるような規範意識が存在しているのか否かを検討したい。

また、漢語を収録した「本篇」では、熟語の語頭の字音が異なれば別の見出しとして立項されるため、多くの複数字音が認められる。「色葉字集」「小玉篇」に共通する音形が「定訓」のような性格を有するのであれば、その音形は、「本篇」所属漢語において多く用いられている字音と一致するのではないかという予想ができる。この点についても検討したい。

## 1.2 本稿の目的と構成

以上を踏まえ、本稿では、以下の①②を明らかにすることを目的とする。

- ① 「色葉字集」と「小玉篇」との双方の間で、字音はどの程度一致するのか。それらの字音は、呉音・漢音どちらの体系に属するものが多いか。
- ② 「本篇」見出し字の複数字音と比較した場合に、どのような字音が選択されていると言えるか。音形の選択について、本篇収録漢語の語形と、どの程度関連性が見出せるか。

---

<sup>3</sup> ただし、「本篇」「色葉字集」が成稿してから「小玉篇」が編纂されたとは考えにくい点があるようである。白井（2002a）は、「小玉篇」は、「本篇」「色葉字集」に共通する基本的な漢字を欠く例が多いことから、「本篇」と色葉字集を編集する段階に想定される文字種の集合体から直接成立し、本篇・色葉字集に併せて相補う関係にあると考えられる」（白井 2002a: 54）と結論づけている。

以下では、第二節で計量のためのデータ化の手続きについて述べ、第三節で①の問題を、第四節で②の問題を扱う。

『落葉集』からの引用にあたっては、掲出字と左右傍訓を「医い」のように示し、特に必要のない限り、掲出字下部の和訓は省略する。字音のみを引く場合は「医（い）」のように示す。字種を表す際には、《医》のように《 》を用いることもある。用例の所在を示す際には、必要に応じて、本篇を「本」、色葉字集を「色」、小玉篇を「小」と略記し、丁数は、『落葉集』原本に示されるものに従って、〔本1オ2〕のように示す。

## 2 調査方法

底本には、『天理図書館善本叢書 落葉集二種』所収の天理本の影印を用いた。ただし、書き入れは除き、活字部分に限定した。

調査にあたっては、「本篇」「色葉字集」「小玉篇」の見出し字と、傍訓の字音とを、Microsoft Excel ファイルとして整理した（図1）。篇末の正誤表「違字」に掲出がある箇所については、訂正後の漢字・字音に従ったが、他の存疑箇所についてはそのままに入力した。また、「色葉字集」「小玉篇」には、字形の異なる活字を連続して掲出し、傍訓に踊り字を用いた例（以下（白井 2002b・白井 2003）に従い「連続掲出」と呼ぶ）があるが、それらについては統合して一行とした。

	B	C	E	F	G	I	J	K	L	M	N	O	P	Q
1	固有ID	字音	現代仮名遣	単字	原本字	頁	丁数	表裏	行割	行内順	篇	部	備考	呉音漢音判定
65	色01a8_1	しや	シャ	砂		129	1 a		8	1	色葉字集	い		呉音
66	色01a8_2	じ	ジ	磁		129	1 a		8	2	色葉字集	い		(呉音)
67	色01a8_3	けん	ケン	犬		129	1 a		8	3	色葉字集	い		
68	色01a8_4	ちよ	チョ	猪		129	1 a		8	4	色葉字集	い		
69	色01a8_5	く	ク	狗		129	1 a		8	5	色葉字集	い		呉音
70	色01a8_6	ゑん	エン	厭	厭	129	1 a		8	6	色葉字集	い		
71	色01a8_7	がん	ガン	巖		129	1 a		8	7	色葉字集	い		
72	色01a8_8	しゆつ	シュツ	出		129	1 a		8	8	色葉字集	い	「出出」を統合	
73	色01a8_10	と	ト	徒		129	1 a		8	10	色葉字集	い	「徒徒」を統合	
74	色01a8_12	しゆ	シュ	修		129	1 a		8	12	色葉字集	い		呉音
75	色01b1_1	ひ	ヒ	部		130	1 b	1	1	1	色葉字集	い		
76	色01b1_2	くはく	カク	郭		130	1 b	1	2	2	色葉字集	い		
77	色01b1_3	がい	ガイ	亥		130	1 b	1	3	3	色葉字集	い		(呉音)
78	色01b1_4	じゆ	ジュ	寿		130	1 b	1	4	4	色葉字集	い		呉音
79	色01b1_5	じやう	ジョウ	争		130	1 b	1	5	5	色葉字集	い		呉音濁

図1 Microsoft Excel によるデータの整理

以下では、個別的な問題について、三点取り上げる。

## 2.1 諸本間での異同

『落葉集』の諸本としては、イエズス会本・大英図書館本・ライデン本・パリ本・クロフォード本・天理本が知られているが、諸本間で、活字の組み替えや補写による異同が若干例存する。そのうちイエズス会本と天理本との間の異同で、計上に関わる3箇所について、土井（1986）の解題に基づき整理しておく。

### ①本篇 5 オ 5 行目

【天理本】（大英図書館本・クロフォード本・ライデン本も同じ）

○亡<sup>ぼう</sup>ほろぶ …… 所<sup>しよ</sup>ところ ○坊<sup>ぼう</sup>ちまた 一主<sup>ず</sup>あるじ 一号<sup>がう</sup>な

【イエズス会本】

○亡<sup>ぼう</sup>ほろぶ …… 所<sup>しよ</sup>ところ ○

### ②本篇 43 ウ 2-3 行目

【天理本】（大英図書館本・クロフォード本・パリ本・ライデン本も同じ）

○義<sup>ぎ</sup>のり …… 一定<sup>ちやう</sup>さだむ 一式<sup>しき</sup>のり ○者<sup>ぎ</sup>をきな 一婆<sup>ば</sup>うば ○議<sup>ぎ</sup>はかる 一定<sup>ちやう</sup>さだむ ……

【イエズス会本】

○義<sup>ぎ</sup>のり …… 一定<sup>ちやう</sup>さだむ ○者<sup>ぎ</sup> 一婆<sup>ば</sup>うば ○儀<sup>ぎ</sup>のり 一式<sup>しき</sup>のり ○議<sup>ぎ</sup>はかる 一定<sup>ちやう</sup>さだむ ……

### ③色葉字集 6 オ 7 行目

【天理本】（クロフォード本・ライデン本・パリ本も同じ）

…… 陰<sup>かげ</sup>いん ○尸<sup>かほね</sup>し ○嬋<sup>かほよし</sup>せん ……

【イエズス会本】（大英図書館本も同じ）

…… 陰<sup>かげ</sup>いん ○嬋<sup>かほよし</sup>せん ……

①は、「坊」以降は印刷終了後に手擦しで加えられたものであるという。ただし、傍訓は天理本のみに見られる書き入れであるため、「坊（ぼう）」は計量に含めない。

②については、天理本に従って、「儀（ぎ）」は計量に含めない。

③については、天理本に従って、「尸（し）」を計量に含める。

## 2.2 濁点の有無

『落葉集』の仮名活字には濁点・半濁点が使用されており、該当する音節に対しては義務的に施されているように見受けられる。しかし、刷りの墨の付き方によっては、濁点・

半濁点が鮮明に映らないことがあり、点の有無・種別の判断に迷う例がある<sup>4</sup>。今回の調査では、判断に迷う例は、底本は異なるが、小島（1978）の索引に従った。

ただし、「本篇」においては、清音ではじまる音節を前半に、濁音ではじまる音節を後半に排列する原則が認められるため、この原則に反し、かつ、疑わしい例については清濁を改めたところがある<sup>5</sup>。

### 2.3 字種の同定

『落葉集』では、同形の活字を複数の字種に用いたり、異形活字を同一の字種に用いたりすることがあるが、計量に際しては適宜、統合・分離を行った。

前者（同形の活字を複数の字種に用いる例）には、以下のような例がある<sup>6</sup>。

計：字音から、〔本 8 オ 7〕〔小 16 オ 2〕は《斗》と判断し、〔本 28 ウ 6〕〔本 29 オ 1〕〔色 2 オ 7〕〔小 3 オ 3〕は《計》と判断した。

斎：「ひとし」の傍訓がある〔本 57 ウ 3〕〔色 20 ウ 7〕〔小 16 ウ 7〕は《斎》と判断し、「ものいみ」の傍訓があり示部に配される〔小 10 オ 6〕は《齋》と判断した。

状：「あらはす」の傍訓がある〔色 16 オ 5〕〔小 8 オ 8〕は《状》と判断し、「さかんなり」の傍訓がある〔本 40 オ 5〕〔色 17 ウ 1〕は《壯》と判断した。

良：収録漢語から〔本 12 ウ 3〕は《良》と判断し、邑部に配される〔小 5 ウ 7〕は《郎》と判断した。

推：「をす」の傍訓がある〔本 60 ウ 5〕と手部に配される〔小 4 オ 6〕は《推》と判断し、「しい」の傍訓がある〔色 19 ウ 7〕と木部に配される〔小 6 オ 4〕は《椎》と判断した。

俟：本篇では《侯》に対応する例もあるが、〔色 10 ウ 9〕〔小 1 ウ 4〕は《候》と判断した。

---

<sup>4</sup> 例えば、「時<sup>し</sup>とき」〔小 1 オ 2〕の「し」には、薄い色の点の一つ見えるが、濁点かどうか判別しがたい。「本篇」の見出し字としては「〇時<sup>じ</sup>とき」〔本 50 ウ 7〕しか見えないため、「じ」かと思われるが、《時》の漢音はシであって、「〇四<sup>しい</sup>よつ……-時<sup>し</sup>とき」〔本 47 オ 1〕の例もあることから、清音のシを認めてよいようにも思われる。「求<sup>く</sup>もとむ」〔小 5 オ 8〕などは、呉音グ・漢音キウであり、清音でクと読む熟語を見出すことはできないため、存疑例といわざるを得ない。

<sup>5</sup> 排列原則に反する例のうち、例えば「義<sup>ぎ</sup>のり」〔本 43 ウ 1〕は、濁点が認めたいが、「ぎ」とした。「照<sup>ぜう</sup>てらす」〔本 60 オ 5〕も濁点が不明瞭であり、小島（1978:281）では「せう」としているが、別に「照<sup>ぜう</sup>てらす」〔本 59 オ 7〕の見出しがあるため、当該箇所は「ぜう」と見た。一方で、「漂<sup>へう</sup>たよぶ」〔本 7 ウ 8〕などは、そのまま「へう」とした。

<sup>6</sup> 以下に示した画像は、筆者が手写したものである。

なお、《着》と《著》には同一字形が用いられており、《著》に統合した。

後者（異形活字を同一の字種に用いる例）については、白井（2002b）において、異字体関係にあるものと異字形関係にあるものとに分類・整理されており、おおむね当該論文に従って統合したが、《惰<sup>7</sup>》と《墮》、《橋》と《驕》は別字種とみた。

なお、旧字体の体系では別字種であった《余》と《餘》、《弁》と《辨》については、これらを区別した。《點》と《点》も、本篇では別の見出しとなっているため、例外的に区別した。《恵》と《慧》も、字体上はどちらも「恵」の草体に見えるが、活字の使い分けが指摘されているため、区別した（豊島 2002: 52）。さらに、《貌》と《貞》も、前者は和訓「かたち」字音「ほう」、後者は和訓「かほ」字音「めう」で、使い分けが見られるため、別字種に認識されていたものと判断して区別した。

各篇の字種数については、3.1・3.2・4.1の冒頭に述べる。

### 3 「色葉字集」「小玉篇」の漢字音の概観

#### 3.1 「色葉字集」の漢字音

本稿で調査対象とするのは、「色葉字集」23ウまでの単字掲出部分に限定する。付録の「百官并唐名之大概」「国尽」や、熟字掲出部分にみられる字音（例：「為中<sup>いなか</sup>」の「為（い）」など）は、対象外とする。

上の範囲における見出し字の延べ数は2127項目（連続掲出の16字を除く）であり、見出し字の異なり数（字種数）は以下の通りとなる。

4 箇所：2 字種（強後）

3 箇所：16 字種（院怨過懷屑荊行種首縮生長泥殿倒柄）

2 箇所：161 字種（辰悪案謂違育逸因運影映炎王温何荷解灰芥外角郭革乾感間希機季騎  
擲拳虚競狂曲禽狗驅空遇申経繫結檢賢遣原滅古垢校網因鎖坐再妻在策錯指室  
実斜者寂主呪寿囚周就修淳傷嘗昌焼笑上情森塵尋崇枢接節戰鮮禪疎蘇僧早息  
村太怠脱弾断稚築柱著彫調直鎮通低転堵徒都唐頭童忍納拝背薄癸美布封風平  
僻謀僕翻盲黙誘与容抑翼略慮領令露劳腕僮坼毀嬋戮棘游瑕瑾癩蘿）

1 箇所：1749 字種

このうち、一字複数音（アヤワ行の仮名遣の揺れとイウ／ユウの揺れは捨象する。以下

<sup>7</sup> 『落葉集』では「𠄎𠄎日有土」のような字体で現れる。

同様) となるのは下記の 12 字種である。右傍訓を【 】に入れて示す。

○呉音と漢音の差異によるもの (9 字種)

解：げ【とく】／かい【さとる】

希：け【まれなり】／き【こひねがふ】

競：きやう【あらそふ】／けい【きそふ】

経：きやう【ふる】／けい【たてすぢ】

発：ほつ【をこる】／はつ【ひらく】

繫：けい【かくる】／け【つなぐ】

実：じつ【みのる】／しつ【まこと】

弾：だん【ひく】／たん【はじく】

童：どう【かぶる】／とう【わらはべ】

○その他 (3 字種)

温：うん【ぬるし】／おん【あたたか】

接：せう【まじはる】／せつ【とる】

彫：ちう【ほる】／てう【ゑる】

重出する 179 字種のうち複数字は 12 字種で、一割にも満たない。4 箇所に見える「後(ご)」や、3 箇所に見える「懷(くはい)」「行(ぎやう)」「生(しやう)」は、対立する字音として「後(こう)」「懷(ゑん)」「行(かう)」「生(せい)」が想定できるにもかかわらず、一定している。「色葉字集」は、字音の固定性が相当に強いことがうかがえる。

続いて、日本の古文献に確認される実例を根拠として呉音・漢音が判断されている<sup>8</sup>、『三省堂五十音引き漢和辞典 第二版』(以下『五十音引き』)の音訓欄にしたがって、呉音・漢音の音形が対立する字の字音体系を判断したところ、次の結果を得た<sup>9</sup>(表 1)。2.2 で述べたように、濁点の有無の判断が難しい例があるため、「実(呉音ジツ/漢音シツ)」のよ

<sup>8</sup> 佐々木 (2011) p.31 を参照。

<sup>9</sup> 呉音と漢音が清濁以外でも対立する字については、清濁の区別を捨象して呉音/漢音の判断を行った。具体的には、「呉音は清音だが濁点のある字」として、「争(じやう)」「1ウ1」「懈(げ)」「4ウ6」「守(じゆ)」「13オ9」「徂(げ)」「15ウ5」の4字を、「呉音は濁音だが濁点のない字」として、「呪(しゆ)」「1オ2・11ウ4」「村(しゆん)」「7ウ6」「巧(けう)」「8オ3」「其(こ)」「8ウ3」「曇(とん)」「12オ8」「扱(ちやく)」「20ウ1」「關(ひやく)」「20ウ8」の7字を、「漢音は濁音だが濁点のない字」として、「児(し)」「4オ8」「頑(くはん)」「6ウ1」「貌(ほう)」「6ウ2」「武(ふ)」「8オ4」「靡(ひ)」「10オ4」「銀(きん)」「19ウ7」の6字を含めた。ただし、「強(かう)」「9オ6・15オ1・16ウ1・20オ4」と「重(ちう)」「6ウ2」については、呉音の「強(かう)」「重(ちう)」が「本篇」に見えることを踏まえ、含めなかった。また、「儻(ざん)」「2ウ1」「賃(ちん)」「9オ3」「獸(じう)」「13ウ9」は『五十音引き』に従い「慣用音」とみて、呉音にも漢音にも分類しなかった。

うに、呉音と漢音が清濁のみにおいて対立する字については、これを分けて示す。

表 1 「色葉字集」における呉音・漢音

	呉音	漢音
清濁以外で対立	319 字種 350 項目	305 字種 342 項目
清濁のみで対立	129 字種 141 項目	81 字種 91 項目
合計	448 字種 491 項目	386 字種 433 項目

全体としては、呉音が 53～54%、漢音が 46～47%で、呉音の方がやや優勢であるが、漢音とほぼ拮抗しており、呉音ないし漢音に統一するような規範意識は乏しいように思われる。漢音が優勢であった『色葉字平他』類の韻書に比べると、より通俗的・日常的な字音を反映しているのではないかと思われる。

### 3.2 「小玉篇」の漢字音

本稿で調査対象とするのは、「小玉篇」17 ウまでのうち、末尾の「十干之異名」と「十二支之異名」の 22 字を除く見出し字全てである。十干十二支を除いた理由は、この 22 字には非常用的な唐音系字音が意図的に施されている<sup>10</sup>ように見受けられ、字音の常用性を検討する本稿の趣旨からは外れるためである。

上の範囲における見出し字の延べ数は 2342 項目（連続掲出の 24 字を除く）であり、見出し字の異なり数（字種数）は以下の通りとなる。

3 箇所：7 字種（窺欣塵須盤微翼）

2 箇所：250 字種（金未安委異医引飲塩応横音加科海灰蓋笠感柑岩翫雁頑基既祈規貴戲窮居举魚競卿叫境強勤均欽禁吟勳薰軍傾兄繫荆傑潔健憲猷硯原減現股御功厚向后孝弘香劫拷刻毅昆歲災裁載察札參士姿詞試字次識射者謝尺寿樹宗修愁習集初助勝嘗宵床承掌焦照省祥笑賞常織食辱唇吹炊崇杉頗雀栖盛誓席昔折設節仙扇泉蘇窓蔽則賊尊村对袋炭智稚築竹茶懲潮賃墜的鉄塗努党投当討陶突頓軟乳念悩波破罵敗買壳莫昂帆範煩彼披被彦付富伏暮放褒某牧沒摩磨枚幕万密蜜鳴滅孟役愈唯葉要翌羅雷乱濫藍利李料領累劣蓮勞惑喻嗜嗽寇屐付忖讖截斛梵熾薺疝羈翔耆耄蘿胃誠貪竟蔣訕飡飴）

1 箇所：1821 字種

<sup>10</sup> 丙（ひん）・丁（ちん）・庚（かん）・乙（い）・子（す）・丑（しう）などが該当する。



このうち、一字複数音となるのは以下の 11 字種である。

○呉音と漢音の差異によるもの (7 字種)

兄：きやう／けい [2 ウ 6] / [14 ウ 8]  
 繫：け／けい [10 ウ 3] / [8 オ 5]  
 健：こん／けん [16 オ 1] / [1 ウ 6]  
 須：す／しゆ [5 オ 5] / [9 オ 7・16 オ 3]  
 莫：まく／ばく [13 オ 7] / [5 ウ 5]  
 盤：ばん／はん [15 ウ 1] / [10 オ 1・11 ウ 4]  
 幕：まく／はく<sup>11</sup> [7 ウ 5] / [13 オ 6]

○その他 (4 字種)

習：しう／しゆ [1 オ 5] / [9 ウ 8]  
 焦：せう／しう [5 ウ 3] / [8 ウ 8]  
 富：ふ／ふく [12 ウ 1] / [7 オ 6]  
 愈：ゆ／ゆう [13 ウ 2] / [3 ウ 3]

重出する 257 字種のうち複数音は 11 字種のみで、割合としては「色葉字集」よりも小さい。全体として、一字一音に整理されているようである。

続いて、3.1 と同様、『五十音引き』に従って、字音体系を判断した結果を集計すると、次の通りとなる<sup>12</sup> (表 2)。

表 2 「小玉篇」における呉音・漢音

	呉音	漢音
清濁以外で対立	334 字種 381 項目	308 字種 348 項目
清濁のみで対立	136 字種 148 項目	81 字種 91 項目
合計	470 字種 529 項目	389 字種 439 項目

<sup>11</sup> 「ばく」の誤りとも思われるが、『日葡辞書』に Gunpacu (軍幕) という語があるため、「はく」の可能性も考えられる。ただし、『落葉集』「本篇」では「ぐんぱく」[27 オ 4] とある。いずれにせよ、漢音系字音と判断する。

<sup>12</sup> 注 9 と同様の処理を行い、「呉音は清音だが濁点のある字」として、「争 (じやう)」[16 ウ 2] の 1 字を、「呉音は濁音だが濁点のない字」として、「呪 (しゆ)」[2 ウ 6] 「付 (しゆん)」[3 ウ 8・11 オ 1] 「扱 (ちやく)」[4 オ 5] 「求 (く)」[5 オ 8] 「關 (ひやく)」[14 ウ 5] 「健 (こん)」[16 オ 1] の 6 字を、「漢音は濁音だが濁点のない字」として、「幕 (はく)」[13 オ 6] 「靡 (ひ)」[13 ウ 8] 「貌 (はう)」[16 オ 8] の 3 字を含めた。

全体としては、呉音が約 55%、漢音が約 45%で、「色葉字集」と同様、呉音の方がやや優勢であるが、漢音とほぼ拮抗しており、呉音ないし漢音に統一するような規範意識は乏しいように思われる。

### 3.3 「色葉字集」と「小玉篇」の漢字音の比較

続いて、「色葉字集」と「小玉篇」とで、漢字音の音形がどの程度一致するのかを確認する。

「色葉字集」と「小玉篇」で共通する字種は 1873 字種である。このうち、各篇内で複数音が認められた 22 字種を除いた 1851 字種について、互いに音形が異なる例を集計したところ、123 字種が得られた。以下に全例を掲出する。清濁のみで対立する字は、後方に排列した。また、同一篇内において 2 例以上の重出が見られる場合は、その例数を字音の後に示した。

#### ○色葉字集が呉音／小玉篇が漢音（33 字種）

逢：ぶ／ほう	燭：そく／しよく	述：じゆつ／しゆつ
越：をつ／ゑつ	囟：づ／と	前：ぜん／せん
音：をん／いん 2	成：じやう／せい	善：ぜん／せん
簡：けん／かん	積：しやく／せき	団：だん／たん
元：ぐはん／げん	莊：しやう／さう	陳：ちん／ちん
後：ご 4／こう	直：ぢき 2／ちよく	殿：でん 3／てん
御：ご／ぎよ 2	箱：さう／しやう	電：でん／てん
工：く／こう	米：まい／べい	同：どう／とう
巧：けう／こう (ママ)	霧：む／ぶ	道：だう／たう
砂：しや／さ		銅：どう／とう
濟：さい／せい	侍：じ／し	
桜：やう／あう	自：じ／し	

#### ○色葉字集が漢音／小玉篇が呉音（40 字種）

土：と／ど	外：ぐはい 2／げ	輕：けい／きやう
益：ゑき／やく	還：くはん／げん	児：し／に
家：か／け	求：きう／く	治：ち／ぢ
蚊：ぶん／もん	卿：けい／きやう 2	寂：せき 2／じやく
快：くはい／け	敬：けい／きやう	宗：そう／しう 2

粧：さう／しやう	名：めい／みやう	絃：けん／げん
数：す／しゆ	命：めい／みやう	拷：かう／がう 2
誠：せい／じやう	雄：ゆう／おう	似：し／じ
静：せい／じやう	龍：れう／りう	楯：しゆん／じゆん
第：てい／だい	和：くは／わ	憎：そう／ぞう
如：じよ／によ	寔：ぼく／まく	縄：せう／ぜう
母：ぼ／も		備：ひ／び
法：ほう／ほう	賀：か／が	分：ふん／ぶん
某：ぼう／む 2	群：くん／ぐん	

○その他 色葉字集／小玉篇 (50 字種)

寅：ゑん／いん	覆：ふ／ふく	詔：せう／ぜう
易：い／ゑき	餅：へい／びん	染：せん／ぜん
奥：わう／あう	由：ゆう／ちう	其：こ／ご
狭：きう／けう	遥：いう／よう	茸：せう／ぜう
遇：ぐう 2／ぐ	戍：じう／しゆ	典：てん／でん
屑：せつ 3／せう		曇：とん／どん
熊：ゆう／ゆう	価：げ／け	敗：はい／ばい 2
軸：ちく／ちう	蓋：がい／かい 2	皁：ぼく／はく 2
錫：しやく／たう	頑：くはん／ぐはん 2	武：ふ／ぶ
祝：しう／しゆく	儀：き／ぎ	宝：ぼう／ほう
除：じよ <sup>(ママ)</sup> ／ぢよ	宜：き／ぎ	崩：ほう／ぼう
設：け／せつ 2	銀：きん／ぎん	朋：ほう／ほう
茶：さ／ちや 2	研：けん／げん	嶮：けん／げん
辻：しん／じう	驗：げん／けん	懈：げ／け
馴：きん／くん	袴：くは／ぐは	懺：ざん／さん 2
秤：へい／びん	守：じゆ／しゆ	砌：せい／ぜい
謬：べう／びう	酬：しう／じう	繡：じゆ／しゆ

3.1 や 3.2 に挙げた例と比べると、多くの不一致が指摘できる。しかし、重出字を分母とする割合で比較すれば、「色葉字集」は 12 / 179、「小玉篇」は 11 / 257、両編では 123 / 1851 であり、いずれも 4~7%程度である。この二編における字音は、だいたいにおいて一致すると言ってよいであろう。

## 4 「本篇」の漢字音との比較

### 4.1 「本篇」見出し字の漢字音の概観

「本篇」の見出し字の総数は 1685 字で、字種数の合計は 1394 字種である。このうち、一回のみ現れるのは 1140 字種で、複数回現れるのは 254 字種となる。

原則として、本篇においては、見出し字の重出は、字音（発音）が異なることを意味するのであるが、完全な重出例に「配<sup>はい</sup>くばる」[3 ウ 4] [5 オ 4] がある。また、仮名遣いの揺れとみられる例に「勇<sup>ゆう</sup>すくやか」[2 ウ 6]・「勇<sup>ゆう</sup>いきむ」[44 ウ 7] がある。

このほか、-p、-k 韻尾字では、促音形と非促音形が別の見出し字として立項される。例えば、《学》は、「<sup>がく</sup>学<sup>まなぶ</sup>・<sup>げう</sup>業<sup>しはぶ</sup>……」[16 オ 2] と「<sup>がつ</sup>学<sup>まなぶ</sup>・<sup>かい</sup>海<sup>うみ</sup>……」[16 オ 8] とに見える。このような例は 39 字種 42 例<sup>13</sup>見えるが、あくまで異形態であって、4.2 において「色葉字集」「小玉篇」の単字音形との比較することを踏まえると、非促音形に統合するのがよいと判断した。

以上の統合操作を加えた上で、一字複数音を持つ字を下に掲げる。

4 音：1 字種（相）

3 音：17 字種（日月越下宮強行周宗重暖著博夫弘平龍）

2 音：210 字種（木土丁火金未安依易衣遺一逸飲陰隱右影榮永疫怨遠黃温音伽夏家河会廻快外隔楽還眼希気飢吉客逆牛去虚京供胸極動九群兄形敬経計輕結権献見元言後公功口向孝弘江降香合歳济作雜四士師旨至詩治耳自七執質若寂主収集柔祝述承招燒照鐘上食深神人須世是成正清生精西請静積赤節前全早太打大段男地茶柱挑聴直沈陳定提典殿田都頭独内南二肉入納能壳白莫癸比備微眉貧富父武風物分文兵便補奉法豊亡傍帽謀没末万密無名明猛目役葉勇有猶由遊陸陸流礼六論和饑洒穢籠）

これらの複数音の内実はさまざまである。「易（えき／い）」「祝（しゅう／しゆく）」のように中国原音における音類の違いを反映する例もあれば、「<sup>あし</sup>下<sup>ぎよ</sup>・<sup>かたる</sup>語<sup>こ</sup>・<sup>ひ</sup>火」[38 オ 2]・「<sup>ひん</sup>兄<sup>あに</sup>・<sup>てい</sup>弟<sup>をと</sup>・<sup>しゆ</sup>衆<sup>もろ</sup>」[55 ウ 5] のような唐音系字音も多く指摘できる。また、特殊な読み方をする漢語や地名から単字音形を析出した例が多く見られ、「<sup>はか</sup>博<sup>ひろし</sup>・<sup>せ</sup>士<sup>おとこ</sup>・<sup>多</sup>

<sup>13</sup> 六（ろつ）・白（はつ）・入（にっ）・北（ほつ）・法（ほつ）・独（どつ）・誑（どつ）・毒（どつ）・勅（ちよつ）・嫡（ちやつ）・著（ちやつ）・立（りつ）・六（りつ）・臆（をつ）・各（かつ）・合（かつ）・合（がつ）・学（がつ）・答（たつ）・即（そつ）・俗（ぞつ）・納（なつ）・落（らつ）・藤（らつ）・国（こつ）・劫（こつ）・業（ごつ）・極（ごつ）・獄（ごつ）・悪（あつ）・作（さつ）・雜（ざつ）・脚（きやつ）・急（きつ）・玉（ぎよつ）・赤（しやつ）・積（しやつ）・十（じつ）・熟（じゆつ）・百（ひやつ）・白（びやつ）・木（もつ）が全例。

た おほし」[5オ4]・「由<sup>ゆい</sup> - 緒<sup>しよ</sup>を」[44ウ8]・「備<sup>びつ</sup> - 中<sup>ちう</sup>なか」[56ウ1]などが挙げられる。

しかし、過半を占めるのは、呉音と漢音の対立であり、計 164 字種が指摘できる（うち清濁のみで対立する字が 27 字種ある）。最後に、この種の対立の複数音を、「色葉字集」「小玉篇」の音形と比較したい。

#### 4.2 「本篇」と「色葉字集」「小玉篇」の漢字音の比較

本項では、4.1 で述べた「本篇」見出し字の複数音のうち、呉音・漢音が清濁以外で対立する 137 字種について、「本篇」収録漢語に見られる音形と、「小玉篇」「色葉字集」の音形とを比較する。なお、《丁》《九》《二》《亡》《帽》《六》については、「色葉字集」または「小玉篇」が項目を欠いているため、また《強》《重》《懺》についても音形の在り方が他と異なる<sup>14</sup>ため除外した。結果として、比較対象となる字種は 128 字種となった。

以下、「色葉字集」「小玉篇」において呉音のみが現れる例、漢音のみが現れる例、呉音漢音が揺れる例に分けて、表の形で示す（表 3～5）。「本篇前項呉音／漢音数」には、「本篇」の見出し字内部に収録されている漢語の数を、「本篇後項呉音／漢音数」には、「本篇」全体でその字音が語末に現れる漢語の数を示した（三字以上の漢語については、分解した結果、二字漢語の後項となる場合のみ加えた）。さらに、呉音と漢音との間で、用例数の合計が 5 以上で、かつ、3 倍以上の開きがある場合は、多い方を灰色に塗りつぶした。

表 3 「色葉字集」「小玉篇」で呉音のみ（50 字種）

番号	漢字	本篇見出し字複数音 (呉音／漢音)	本篇前項 呉音数	本篇後項 呉音数	本篇前項 漢音数	本篇後項 漢音数
1	日	にち・につ／じつ	16	16	12	55
2	木	もく／ぼく	9	3	4	23
3	未	み／び	19	1	1	0
4	依	ゑ／い	5	2	1	0
5	飲	をん／いん	4	2	3	1
6	右	う／ゆう	9	6	2	1
7	疫	やく／ゑき	1	0	1	0
8	黄	わう／くほう	6	2	13	2
9	下	げ／か	38	16	1	26

<sup>14</sup> 《強》《重》は、「色葉字集」ならびに「小玉篇」では、呉音でも漢音でもない「かう」「ちう」で現れる。《懺》は、「本篇」見出し字としては、呉音「せん」と漢音「さん」が見えるが、「色葉字集」では「さん」、「小玉篇」では慣用音で「ざん」とある。

10	隔	きやく／かく	7	2	2	1
11	客	きやく／かく	5	1	17	18
12	逆	ぎやく／げき	14	5	5	0
13	究	く／きう	1	0	1	0
14	京	きやう／けい	4	6	3	0
15	極	ごく・ごつ／きよく	27	4	1	4
16	形	ぎやう／けい	9	20	1	0
17	言	ごん／げん	14	24	1	28
18	向	かう／きやう	6	7	1	0
19	行	ぎやう／かう	18	57	12	10
20	香	かう／きやう	6	28	7	6
21	歳	さい／せい	4	11	1	1
22	耳	に／じ	10	7	1	0
23	収	しゆ／しう	4	2	2	0
24	柔	にう／じう	4	2	3	1
25	人	にん／じん	33	92	27	51
26	世	せ／せい	12	16	4	11
27	是	ぜ／しい	5	3	1	0
28	正	しやう／せい	19	13	6	1
29	生	しやう／せい	22	35	1	9
30	西	さい／せい	12	1	11	1
31	赤	しやく・しやつ／せき	13	0	4	0
32	相	さう／しやう	11	31	2	2
33	男	なん／だん	2	8	2	0
34	定	ぢやう／てい	19	20	3	1
35	提	だい／てい	2	4	4	0
36	内	ない／だい	27	24	2	3
37	肉	にく／じく	5	18	2	0
38	入	にう・につ／じゆ	10	8	9	1
39	納	なう・なつ／だう	4	8	1	0
40	払	ほつ／ふつ	5	1	1	0
41	物	もつ／ぶつ	5	42	3	16
42	兵	ひやう／へい	13	8	3	13

43	末	まつ／ぼつ	5	4	5	1
44	万	まん／ばん	20	4	49	0
45	密	みつ／びつ	15	10	1	0
46	無	む／ぶ	81	5	32	1
47	明	みやう／めい	11	14	16	22
48	目	もく／ぼく	5	14	1	4
49	有	う／ゆう	16	4	6	2
50	流	る／りう	11	4	8	28

表4 「色葉字集」「小玉篇」で漢音のみ(53字種)

番号	漢字	本篇見出し字複数音 (呉音／漢音)	本篇前項 呉音数	本篇後項 呉音数	本篇前項 漢音数	本篇後項 漢音数
51	月	ぐはち・ぐはつ／げつ	7	9	30	50
52	金	こん／きん	7	2	31	12
53	衣	ゑ／い	6	43	8	1
54	遺	ゆい／い	6	0	4	0
55	陰	をん／いん	2	0	5	15
56	隱	をん／いん	1	0	3	3
57	影	やう／ゑい	2	0	1	17
58	永	やう／ゑい	2	1	10	1
59	怨	をん／ゑん	3	0	6	3
60	遠	をん／ゑん	3	1	46	5
61	夏	げ／か	2	4	26	12
62	会	ゑ／くはい	4	7	5	11
63	廻	ゑ／くはい	1	2	15	5
64	眼	げん／がん	4	11	22	26
65	気	け／き	1	0	14	57
66	飢	け／き	1	0	8	1
67	牛	ご／ぎう	6	0	9	19
68	去	こ／きよ	3	2	11	10
69	虚	こ／きよ	2	0	19	3
70	宮	く・くう／きう	2	10	15	14
71	胸	く／けう	5	0	6	1

72	勤	ごん／きん	4	0	3	1
73	計	け／けい	1	0	5	9
74	権	ごん／けん	5	0	10	2
75	献	こん／けん	1	2	3	1
76	公	く／こう	10	0	11	8
77	功	く／こう	3	1	7	13
78	口	く／こう	6	1	9	16
79	孝	けう／かう	1	0	4	2
80	弘	ぐ／こう	1	0	1	0
81	若	にあく／じやく	2	1	5	2
82	周	しゆ／しう	2	0	2	0
83	鐘	しゆ／せう	1	0	3	11
84	食	じき／しよく	3	13	10	13
85	清	しやう／せい	3	0	31	6
86	精	しやう／せい	2	1	11	3
87	都	つ／と	1	1	5	7
88	売	まい／ばい	3	2	2	1
89	白	びやく・びやつ／は く・はつ	11	2	50	15
90	微	み／び	3	0	17	3
91	眉	み／び	1	0	6	3
92	武	む／ぶ	2	0	19	1
93	文	もん／ぶん	9	23	23	11
94	平	ひやう・びやう／へい	3	1	19	8
95	補	ふ／ほ	1	0	8	5
96	奉	ぶ／ほう	2	1	5	0
97	謀	む／ぼう	1	0	9	6
98	没	もつ／ぼつ	3	0	7	6
99	猛	みやう／まう	1	1	4	0
100	猶	ゆ／ゆう	1	0	1	0
101	遊	ゆ／ゆう	3	0	10	10
102	陸	ろく／りく	1	3	3	1
103	礼	らい／れい	3	2	8	13



表5 「色葉字集」「小玉篇」で呉音・漢音の揺れあり（25字種）

番号	漢字	本篇見出し字複数音 (呉音/漢音)	本篇前項 呉音数	本篇後項 呉音数	本篇前項 漢音数	本篇後項 漢音数
104	越	をつ/ゑち・ゑつ	6	1	5	1
105	音	をん/いん	3	11	6	11
106	家	け/か	4	25	22	34
107	快	け/くはい	1	0	5	2
108	外	げ/ぐはい	8	3	14	29
109	還	げん/くはん	5	0	2	3
110	希	け/き	2	0	2	0
111	敬	きやう/けい	3	4	1	0
112	経	きやう/けい	12	17	3	0
113	軽	きやう/けい	3	0	11	2
114	元	ぐはん/げん	5	0	6	5
115	後	ご/こう	5	28	28	2
116	濟	さい/せい	1	2	1	4
117	寂	じやく/せき	6	2	2	0
118	宗	しう・しゆ/そう	6	8	3	2
119	成	じやう/せい	6	6	4	4
120	静	じやう/せい	2	4	1	0
121	積	しやく・しやつ/せき	4	1	5	2
122	直	ぢき/ちよつ	17	3	1	5
123	莫	まく/ばく	1	0	3	0
124	発	ほつ/はつ	13	3	5	3
125	法	ほう・ほつ/はつ	46	68	5	19
126	名	みやう/めい	8	20	41	7
127	龍	りう/れう	9	3	7	11
128	和	わ/くは	19	7	1	1

全体的に見て、漢語の用例が多い方の音形と一致する傾向にあることが確認できる。この傾向は、とくに「色葉字集」「小玉篇」が漢音となる字に著しく、34/53字については、「本篇」漢語における漢音の用例が呉音の3倍以上に上っている。

しかし、次のような例外も散見される。漢音の方が用例数が多いにもかかわらず、呉音が選択されている例に、(1)「日(にち)」(2)「木(もく)」(8)「黄(わう)」(11)「客(き

やく) (44)「万(まん)」(47)「明(みやう)」(50)「流(る)」の7字があり、呉音の方が用例数が多いにもかかわらず、漢音が選択されている例に、(53)「衣(い)」(54)「遣(い)」(88)「売(ばい)」の3字がある。

このうち、(1)「日(にち)」(2)「木(もく)」(50)「流(る)」(53)「衣(い)」については、前項と後項とで、用例数の多寡が逆転していることが注意される。これらは、前項に限れば多数派の音が選択されているのである。このような位置による音形の分布の偏りについて、現代日本語では、少数の語彙を除けば、語頭か非語頭かという位置によって字音が読み分けられる漢字群があることが指摘されている(屋名池 2005)。例えば、《木》という字は、現代語では、語頭でモク、非語頭でボクと読まれるが、(2)では既にそのような傾向をうかがうことができる<sup>15</sup>。また、(9)「下(げ)」(17)「言(ごん)」(42)「兵(ひやう)」(93)「文(ぶん)」(102)「陸(りく)」なども、後項に限れば、「下(か)」「言(げん)」「兵(へい)」「文(もん)」「陸(ろく)」の方が、用例数が多くなっている。これらに対し、(20)「香(かう)」(35)「提(だい)」(57)「影(ゑい)」(72)「勤(きん)」など、逆の傾向を示す例もあるが、(42)や(93)ほど目立った差はない。やはり、単字音としては、漢語の語頭(前項)によく現れる音形が想起されやすく、(1)・(2)・(50)・(53)などは、そのために選択されたのではないだろうか。

このほか、(11)「客(きやく)」や(44)「万(まん)」などについては、一字漢語としての語形が反映したのではないかと考えられる。

(104)~(128)については、(1)~(103)に比べると、三倍以上の偏りを持つ字音が少なく、一定の用例数の複数音を有する字が多いことがうかがえる。

以上の点について考察を深めるには、漢語の異なり数だけでなく、個々の漢語の常用性(使用頻度)についても考慮する必要があるが、今後の課題としたい。

また、これまで字音の「選択」という言葉を用いてきたが、『落葉集』の「色葉字集」や「小玉篇」における字音の付与に関わった編者が、基本方針として、「本篇」を参照して一定の基準のもとに字音の採否を行ったのか、「本篇」は参照せずに標準的な字音をその都度想起して選び付したのかは、定かでない。どちらも行われたのではないかと想像はするものの、この点についての具体的な検討は不問に付して考察を行ってきた。どのように編纂されたのかという問題についても、今後考えていきたい。

## 5 結論

本稿では、キリシタン版『落葉集』の漢字音について、以下の点を明らかにした。

<sup>15</sup> 中世末期における「位置による読み分け」については、石山(2022)が、《米》(語頭ベイ、非語頭マイ)に現代語と似た傾向が見えることを指摘している。

- ①「色葉字集」と「小玉篇」との間で共通する字について、左右に傍記される字音は、9割以上の一致率を見せるが、120字ほどの不一致例が存する(3.3)。また、両編の字音体系については、呉音の方が若干多い(約55%)が、漢音の存在感も大きい(3.1、3.2)。
- ②「色葉字集」と「小玉篇」との間で共通する字音を、「本篇」見出し字の複数音(呉音・漢音が清濁以外で対立する例に限定する)と比較した結果、おおむね、「本篇」に収録されている漢語において用例数の多い音形が選択されており、また、後項よりも前項に現れる字音の多寡が反映されやすいことが確認された(4.2)。

4.2 末尾に記した課題に加え、他の資料との比較を通して、中近世における漢字音の使用実態について考察を深めていきたい。

#### 参考文献

- 石山裕慈(2020)「日本漢字音における「一字複数音」の歴史」『漢字文化研究』10. 7-33.
- 石山裕慈(2022)「日常使用の日本漢字音の歴史—『日葡辞書』と現代日用語辞典との比較を通して—」『国語と国文学』99(9). 49-62.
- 大島英之(2022)『色葉字平他』類の韻書における漢字音—大東急記念文庫本・龍門文庫本を例に—『日本語学論集』18. 236(1)-211(26).
- 小島幸枝(編)(1978)『耶蘇会板落葉集総索引』笠間書院.
- 坂水貴司(2016)「清原宣賢書写本に見る漢音形の衰退について」『国文学攷』231. 27-39.
- 佐々木勇(2011)「日本漢音研究の現在」『日本語学』30(3). 28-36.
- 白井純(2002a)「落葉集の掲出文字種について—JIS漢字との比較を含めて—」『国語国文研究』120. 64(1)-53(12).
- 白井純(2002b)「キリシタン文献における字体・字形の認識について—落葉集を例として—」『古辞書とJIS漢字』5. 9-16.
- 白井純(2003)「落葉集」と活字印刷」『訓点語と訓点資料』110. 100(1)-90(11).
- 白井純(2022)「落葉集」『キリシタン語学入門』八木書店. 48-55.
- 鄭炫赫(2005)「落葉集」の字音仮名遣い」『早稲田日本語研究』14. 25-36.
- 土井洋一(解題)(1986)『天理図書館善本叢書と書之部第七十六巻 落葉集二種』八木書店.
- 豊島正之(2002)「キリシタン文献の漢字整理について」『国語と国文学』79(11). 47-59.
- 沼本克明(1973)「変体漢文訓読に於ける字音語の性格」『信州大学人文科学論集』7. 31-43.
- 林謙太郎(2017)『落葉集』における音訓読みについて(2)」『二松学舎創立百四十周年記念論文集 1』二松学舎. 33-56.

屋名池誠（2005）「現代日本語の字音読み取りの機構を論じ、「漢字音の一元化」に及ぶ」『築島裕博士傘  
寿記念国語学論集』汲古書院. 670-692.

山田俊雄（1971）「漢字の定訓についての試論—キリシタン版落葉集小玉篇を資料にして—」『成城国文学  
論集』4. 1-256.

## 付記

本稿は、JSPS 科研費 21J20167・21H00529・21K18364 の助成を受けたものである。4.2 節の、『落葉  
集』本篇の全漢語の検索にあたっては、21H00529 において作成されたデータベースを利用させていただ  
いた。記して感謝を申し上げる。

（おおしま ひでゆき 人文社会系研究科 博士課程二年・日本学術振興会特別研究員）